

親の「褒め」・「叱り」・「見守り」が子どもの内的作業モデル 及び自尊感情に与える影響について

The influence of parent's "praise", "scolding", and "watching"
on the child's internal working model and self esteem

吉田 美波

跡見学園女子大学大学院

人文科学研究科臨床心理学専攻

Minami Yoshida

Division of Clinical Psychology,

Graduate School of Humanities, Atomi University

要 約

研究1の目的は、子どもの発達に良い影響を与えるであろう「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて検討すること、研究2の目的は、「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度が個人の内的作業モデルを媒介し、自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することであった。大学生266名を対象に、①親の養育態度（筆者作成）、②内的作業モデル測定のための「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」（中尾ら、2004）、③自尊感情尺度（山本ら、1982）から構成される質問紙調査をGoogleフォームにて実施した。研究1の結果、自尊感情得点が最も高かったのは「見守り」>「褒め」>「叱り」であり、最も低かったのは「叱り」>「褒め」>「見守り」であった。研究2では、共分散構造分析による内的作業モデルの媒介効果についての検討を行った。その結果、「親密性の回避」の媒介効果のみが認められ、親の養育態度得点が低いほど、「親密性の回避」得点が高く、「自尊感情」得点も低い傾向が見られた。

【Key Words】褒め、叱り、見守り、親の養育態度、内的作業モデル、自尊感情

I 問題と目的

1. 親の養育態度と自尊感情について

親子関係は、子どもが経験する最初の対人場面であり、初めて社会的スキルを学習する場面である（戸ヶ崎、1999）。そのため、養育者からの子どもへの働きかけは、子どもの発達に大きな影響を与えるものである。特に、幼少期における親の養育態度の重要性について指摘されている。幼少期

の親の養育態度と子どもの自尊感情に関連が見られることは数多くの研究において報告されており、例えば、山下ら（2010）によると、子ども時代の両親の養育態度と子どもの自尊感情の間に関連が見られ、高い自尊感情を育てるためには、愛情や共感だけでなく、過保護にならず自律を促進する養育態度が重要であると述べている。さらに、養育者がどのように子どもたちを養育

していくかだけではなく、そのような養育者の養育態度を子どもたちがどのように認知しているかという「養育認知」の重要性も指摘されている。幼少期の養育経験を肯定的に認知しているほど自尊感情が高くなることが明らかとなっている（島，2014；金政，2007）。

2. 「褒め」と自尊感情について

養育者の子どもへの養育行動について、褒めることや叱ること、そして、見守ることについての先行研究が数多く見受けられる。実際の養育の場面において、養育者は褒めたり、叱ったり、時には見守りながら、日々子どもたちと関わっているのではないだろうか。そのため、養育者や教育者など子どもたちと関わる人々は、褒めることや叱ることについて関心を寄せているのだという。

まず、「褒め」と自尊感情の関連について述べる。褒めるという行為は、他者の良い点を指摘・評価することである（澤口ら，2014）。子どもにとって養育者から褒められる経験は、自分自身の存在や行為への承認を意味し、さまざまな先行研究において、自尊感情のような感情的側面に影響を与えることが明らかにされている。例えば、井上（2015）によると、自尊感情の高い人のほうが、そうでない人よりも幼少期に両親からよく褒められていたと感じているという。橋本（2017）においても、母親、父親、教師にかかわらず、よく褒められたと回答した者の自尊感情が高い傾向にあると報告している。これらの結果から、養育者から褒められた経験の多さが、自尊感情の高さと結びついていることが窺え

る。このように、子どもを褒めて育てることが望ましいという考え方が広く共有されており、「褒め」は子どもと関わる大人たちによって日常的に用いられているのである。

3. 「叱り」と自尊感情について

次に、「叱り」と自尊感情の関連について述べる。松島ら（2020）によると、2010年以降から、叱ることを減らす代わりに褒めることを推奨する「叱らない子育て」が流行したという。その理由として、その時期に日本において児童虐待が社会問題化したことが挙げられ、叱ることは、直接的に虐待につながる可能性があるために叱ることよりも褒めることに重点をおいた子どもとの関わりを養育者は好むようになったのだという。子どもたちと関わる養育者や教育者は、子どもを「叱りつけ」悪い行いを修正するよりも、「褒めて」良いところを伸ばそうと考えているようである。

確かに、先行研究から、「叱るという行為は、叱られ手である子どもの行為を叱り手が否定するメッセージを含むものであり、子どもとのコミュニケーションを阻害する危険性をはらんでいる」（佐藤ら，2013）という指摘もある。つまり、養育者が用いる「叱り」の目的や意図が子どもに伝わらず、延いては、養育者が子どもを「叱る」ことによって、養育者と子どもの関係性が脅かされる可能性が示唆されている。そして、養育者から否定される経験が、子どもの自尊感情を低下させる可能性があることが明らかになっている。例えば、野村ら（2008）によると、親の否定的な言葉は、子どもの自尊感情の発達を妨

げ、低くすることにつながるという。やはり、重要な他者である養育者から受容されず、否定される経験は子どもの自尊感情を傷つけることにつながると考えられる。さらに、親からかけられる言葉が否定的である場合、親の口調や態度などから子どもは否定されていると感じ、低い自尊感情につながるのではないかと（野村ら，2008）と考察している。これは、子どもの自尊感情の低下につながるのは、養育者の「否定的な言葉」だけでなく、その否定的な言葉を用いる養育者の「口調」や「態度」といったノンバーバル情報も大いに影響を与えている可能性が示唆されているのである。このように、「叱り」についてのネガティブな側面が強調されているが、本当に子どものよりよい発達を疎外するものであるのだろうか。先行研究の中には、「叱ることが子どもの自尊感情の低下につながるとは言えない」（井上，2015）という報告もあり、叱ることと自尊感情の関係性については、褒めることとの関連性ほど明らかになっているとは言えないのが現状である。

養育者が「叱り」を用いるのは、子どもたちの社会的に望ましいとは言えない行動を改善させたい、社会的に望ましい行動を身に着けてほしいという思いからではないだろうか。叱りについて、阿部ら（2014）によると、「個人が不当と認識する行為を相手に指摘し、改善を求める行為」と定義されている。そして、叱ることは問題行動の抑制だけではなく、子どもの人格形成や社会化において非常に重要な役割を果たしているという。このことから、叱ることには、少なからず子どもたちの心理社会的な育ちにポジティブな影響も与えていると考

えられる。時に、叱ることも子どもの発達に必要不可欠なものであり、自尊感情を高める役割を果たしていることが推察される。

4. 「見守り」と自尊感情について

続いて、「見守り」と自尊感情の関連性について述べる。日本においては、諸外国と比べて、子どもたちを「見守る養育」が重要視されているのだという。日本の幼児教育において、子どものいざこぎに対して、保育者は外側から事の推移を見守り、子どもたちの自主的な問題解決を促すことが多いことが文化比較研究から明らかにされている（Tobin, Hsueh, & Karasawa, 2009, 訳：風間ら，2013）。このような日本の養育態度は、諸外国から「放任」や「傍観」といった批判もあったが、日本の「見守る」保育はそれらとは区別される、子どもたちの自律性を育むことを目的とした「待つ」保育である（中坪，2016）と述べている。「見守る養育」を行う養育者は、おそらく、大人から言われなくても自分自身で行動できる子どもに育ててほしいという発達期待があると考えられる。そのため、養育者による「見守り」は、「褒め」や「叱り」と比べ、養育者からの直接的な介入が少なく、子どもの主体的な行動が促進される働きかけであり、子どもの自尊感情を向上させる働きを持つものであると推察される。

しかしながら、海外の保育者が批判したように、見守りは「放任」や「傍観」と混同されやすい概念であることは否定できない。自尊感情と同義的な概念である「自己肯定感」と褒められる経験、叱られる経験

との関係性について検討した先行研究がある（国立青少年教育振興機構，2017）において、褒められた経験が少なかった者の中でも、叱られた経験が少ない人よりも叱られた経験が多い人の方が、自己肯定感が高い傾向にあると報告されている。要するに、この先行研究の結果から、褒められた経験も叱られた経験も少なかった者は、自己肯定感が低くなる傾向があるということが示唆されている。この褒められた経験も叱られた経験も少なかった者の経験を、「放任」や「傍観」と捉えると、自己肯定感あるいは、自尊感情の低下につながる、という可能性が考えられる。

このような日本において重要視されている養育者の「見守る養育」が、子どもの自尊感情にどのような影響を与えるかについて検討した論文は「褒め」や「叱り」と比べて数少なく、明らかになっていないのが現状である。

5. 「褒め」・「叱り」・「見守り」と自尊感情について

これまで述べてきたことから、養育者や教育者の「褒め」・「叱り」・「見守り」といった働きかけは、それぞれが子どもの心理社会的な育ちを促進するために必要不可欠な関わりであると言える。そして、この、「褒め」・「叱り」・「見守り」をバランスよく用いて子どもに関わることが、子どものよりよい発達を促進すると考えられる。依田ら（2016）は、小学校での教師から子どもたちへの「叱り」場面の観察を行い、観察された14の「叱り」の場面について、中嶋（2014）「自己肯定感を高める「叱り」に必要な子どもたちへのかかわり方」の11

項目と照らし合わせて考察を行っている。その際に、教師が「叱り」だけではなく、「褒め」や「励まし」なども合わせて用いている場面が見られたことを報告している。教師は子どもを叱った後には、その子どもを近くで見守り、そして、他の場面において褒める機会を設けることによって、子どもとの関係性を調整していることが推察される。このように、養育者や教育者などの子どもと関わる大人たちは、「褒め」や「叱り」、そして「見守り」を単独で用いるのではなく、それぞれのバランスを考えながら子どもたちと接しているものと考えられる。そして、そのバランスが適切なものであることが、子どもたちとの信頼関係の構築につながり、延いては、子どもの自尊感情のような肯定的な自己評価につながるのではないだろうか。

6. 内的作業モデルと親の養育態度および自尊感情について

内的作業モデル（Internal Working Model）とは、Bowlby（1969, 1973, 1980）により提唱された概念であり、坂上（2005）によれば「子どもがアタッチメント対象との相互作用を通して、周囲の世界がどのようなものであるのか、母親や他の重要な人物がどのようにふるまうのか、自分自身がどうふるまうのか、といった、自己と他者および周囲の世界に関して構築する表象モデル」とされている。内的作業モデルは、自分が他者から世話され保護され得るかかどうかという「自己」に関するモデルと、他者が自分の要求に応じてくれるかどうかという「他者」に関するモデルの2つからなり、前者のモデルを「自己感」、

後者のモデルを「他者感」という（泉ら、2012）。そして、各個人が持つ内的作業モデルの様式に対応した行動スタイルが、対人場面で現れることがこれまでの研究から明らかとなっており、このような行動スタイルは「愛着スタイル」と呼ばれる（泉ら、2012）。親の養育態度と子どもの愛着スタイルの関連について、岩瀬ら（2016）によると、乳幼児のシグナルに対して、養育者が受容的で応答的であると、乳幼児は、自分は愛される価値があり、他者は良いものであるという安定したモデルを内在化するが、反対に、乳幼児のシグナルに対し、養育者が回避的、拒否的であると、乳幼児は、自分には愛される価値がなく、他者は信頼できないものであるというような不安定なモデルを内在化するという。このように、子どもの保護の求めに対する養育者の働きかけによって、子どもの中にそれぞれ異なった「内的作業モデル」という心的表象が徐々に形成されていくと考えられている。成人愛着研究において、養育者は自分の保護の求めに答えてくれる存在であるか、といった他者に対する期待や信念（他者感）を「親密性の回避」（愛着対象との親密な関係を回避するかどうか）として捉え、自分は養育者から愛され養育される存在であるのか、といった自己に対する期待や信念（自己感）を「見捨てられ不安」（愛着対象から見捨てられるかもしれないという不安が高いかどうか）と捉えるという（中尾、2012；中尾ら、2004）。そして、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の2因子がそれぞれポジティブか、ネガティブかによって、4つの愛着スタイルを構成している（中尾ら、2004）。その4

つの愛着スタイルとは、（1）安定型が、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」とともにポジティブなスタイル、（2）拒絶型が、「親密性の回避」がネガティブで「見捨てられ不安」がポジティブなスタイル、（3）とらわれ型が、「親密性の回避」がポジティブで「見捨てられ不安」がネガティブなスタイル、（4）恐れ型が、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」とともにネガティブなスタイルであるという。

このように、愛着スタイルは、養育者との関係性の中で徐々に形成されていくものであるため、親の養育態度の影響は受けるものである。

島（2014）によると、幼少期の養育経験、あるいは子どもの親の養育態度（ケアと過保護）についての認知が、内的作業モデル（関係不安と親密性回避）を媒介して、社会適応（自尊感情と対人関係）に影響するというモデルが成立することが明らかとなっている。そして、親の養育態度を肯定的に認知しているほど、内的作業モデルの“不安”と“回避”が低く、そして、“不安”と“回避”が低いことが、社会的適応（自尊感情、対人関係）を良好なものにするという。先行研究から、子どもの親の養育態度の認知が、子どもの内的作業モデル形成に影響し、自尊感情の向上および低下につながるということが明らかとなっている。

7. 本研究の目的

子育てにおける「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスが子どもの育ちを促進すると考えられる。しかしながら、「褒め」・「叱り」・「見守り」それぞれが子どもの発

達に与える影響について扱った研究はなされているが、三つ同時に扱った研究はない。

そこで、研究1の目的は、子どもの発達に良い影響を与えるであろう、「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて検討する。

さらに、これまで述べてきた先行研究から、次のようなプロセスを仮定することができる。「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度の認知が、子どもの内的作業モデル形成に影響して、自尊感情の向上及び低下に結びつく、というモデルである。

そこで研究2の目的は、このプロセスを検証するために個人の内的作業モデル（親密性の回避と見捨てられ不安）を媒介変数と仮定し、「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討する（図1、図2参照）。

II 方法

1. 調査対象者

本研究の調査協力者は、関東圏内の4年制女子大学に属する大学生266名（1年生97名、2年生110名、3年生47名、4年生12名）であった。

2. 研究方法

Googleフォームを用いて質問紙調査を実施した。

3. 手続き

調査は、当該大学の講義後に、無記名式にて実施した。調査時期は2021年7月～9月であった。実施に先立ち、対象者に考え込まずありのままに回答すること、無記名式のため個人が特定されることはないことについて教示した。

4. 質問内容

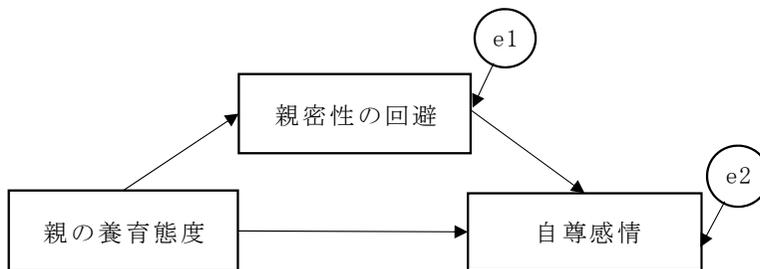


図1 媒介変数（親密性の回避）の効果を示すモデル

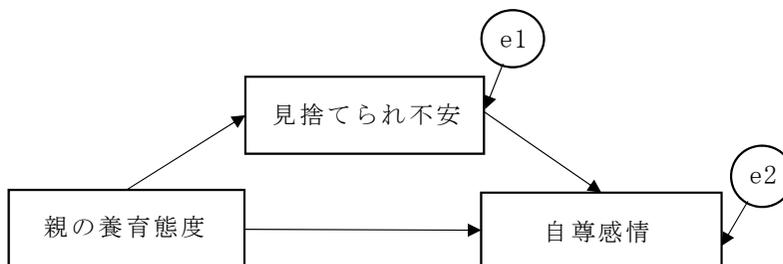


図2 媒介変数（見捨てられ不安）の効果を示すモデル

(1) 基本属性

対象者の基本属性として、学年、所属学部、及び所属学科について尋ねる。

(2) 「褒め」「叱り」「見守り」の認知に関する質問

調査協力者の親もしくは養育者から褒められる経験、叱られる経験、そして、見守られる経験のうち、どの経験が多かったかについて尋ねる質問項目を研究者が独自に作成した。

(3) 一般他者を想定した愛着スタイル尺度 (中尾ら, 2004)

他者に対する愛着スタイルを測定する尺度であり、「見捨てられ不安 (Anxiety)」, 及び「親密性の回避 (Avoidance)」の2因子、計30項目から構成されている。7件法で回答を求める。

成人の愛着研究において、内的作業モデルの測定には、恋人との愛着スタイルを測定する尺度であるECR (the Experiences in Close Relationships) が規準的尺度として多くの研究で使用されている (島, 2010)。このECR日本版尺度「成人愛着スタイル尺度」を中尾・加藤 (2004) が作成している。そして、中尾・加藤 (2004) は、初対面の段階から対人関係を形成する場合の他者との相互作用パターンを想定するためには、従来の恋人を対象とした愛着スタイル尺度では困難であるとして、一般化された他者を想定させ回答させる愛着スタイル尺度である「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」を作成している。そこで、本研究において大学生の内的作業モデルの測定には、この中尾・加藤 (2004) が作成した「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」を用いる。

(4) 自尊感情尺度 (山本ら, 1982)

本尺度は、Rosenberg (1965) が作成した自尊感情尺度における日本版であり、1因子、10項目で構成される。5件法で回答を求める。

5. 分析方法

①まず、収集した各変数の相関関係については、Pearsonの積率相関係数を算出することで検討した。

②次に、内的作業モデル及び自尊感情の平均値が、6パターンの親の養育態度によって異なるかについて、一元配置分散分析で求めた。

③そして、6パターンの親の養育態度が内的作業モデル及び自尊感情へ与える影響と、内的作業モデルの媒介変数としての機能を明らかにするために、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。

④分析の際には、測定した親の養育態度を、Target encodingによって数値化した。Target Encodingとは、主として機械学習の分野で用いられるカテゴリ変数の変換手法の1つである。目的変数の平均値を該当するカテゴリ変数のダミー値として置き換える方法であり、回帰分析を実施する際には他のエンコーディング手法より良い結果を得られやすい。本研究では疑似相関の発生を避けるため、得られたデータを3分割した上でフォールディングを行った。解析にはIBM SPSS 25.0及び、Amos 17.0を使用し、有意水準は5%未満に設定した。

6. 倫理的配慮

跡見学園女子大学研究倫理委員会にて承

認を得た。(受付番号21-001)

(1) 基本属性(学年)ごとの親の養育態度の回答状況

Ⅲ 結果

基本属性(学年)ごとの親の養育態度の回答状況は表1のとおりである。

1. 研究1: 「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて

表1 基本属性(学年)ごとの親の養育態度の回答状況

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
「褒め」>「見守り」>「叱り」	15	19	7	1	42
「褒め」>「叱り」>「見守り」	17	13	3	1	34
「叱り」>「見守り」>「褒め」	12	12	8	3	35
「叱り」>「褒め」>「見守り」	9	22	7	3	41
「見守り」>「叱り」>「褒め」	14	15	9	2	40
「見守り」>「褒め」>「叱り」	30	29	13	2	74
合計	97	110	47	12	266

(2) 「褒め」・「叱り」・「見守り」の順位付け

本研究において、「自尊感情」得点の平均値が高かったパターンの親の養育態度を最も子どもの発達に良い影響を与える養育態度であると捉えることとし、6つのパターンの養育態度を順位付けする。その結果、1. 「見守り」>「褒め」>「叱り」(26.89), 2. 「褒め」>「見守り」>「叱り」(26.1), 3. 「叱り」>「見守り」>「褒め」(25.4), 4. 「褒め」>「叱り」>「見守り」(24.82), 5. 「見守り」>「叱り」>「褒め」(24.8), 6. 「叱り」>「褒め」>「見守り」(24.76)であった。

り」>「褒め」(25.4), 4. 「褒め」>「叱り」>「見守り」(24.82), 5. 「見守り」>「叱り」>「褒め」(24.8), 6. 「叱り」>「褒め」>「見守り」(24.76)であった。

(3) 3つの変数(親密性の回避, 見捨てられ不安, 自尊感情)における相関係数
表2に3つの変数(親密性の回避, 見捨てられ不安, 自尊感情)における相関係数を示した。分析の結果は以下のとおりである。

表2 3つの変数(親密性の回避, 見捨てられ不安, 自尊感情)における相関係数

	1.	2.	3.
1. 親密性の回避	—		
2. 見捨てられ不安	.036	—	
3. 自尊感情	-.244**	-.554**	—

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

る。「親密性の回避」は、「自尊感情」($r = -.244, p < .01$)と負の相関を示したが、「見捨てられ不安」とは有意な相関関係は認められなかった。「見捨てられ不安」は、「自尊感情」($r = -.554, p < .01$)と負の相関を示した。

(4) 6つの養育態度間における愛着スタイル

(「親密性の回避」, 「見捨てられ不安」)と自尊感情の平均値の差

続いて、6つの親の養育態度間に愛着スタイルの「親密性の回避」および「見捨てられ不安」の平均値, 「自尊感情」の平均値に差が見られるかどうかを調べるために、一元配置分散分析を行った(表3)。

表3 親の養育態度と愛着スタイル(「親密性の回避」及び「見捨てられ不安」)及び「自尊感情」(平均値とSD及び多重比較の結果)

項目	1. 「褒め」>	2. 「褒め」>	3. 「叱り」>	4. 「叱り」>	5. 「見守り」>	6. 「見守り」>	自由度	F値
	「見守り」> 「叱り」	「叱り」> 「見守り」	「見守り」> 「褒め」	「褒め」> 「見守り」	「叱り」> 「褒め」	「褒め」> 「叱り」		
親密性の回避	19.4	17.26	53.09	49.29	49.3	43.34	5	4.0**
	-14.29	-11.36	-12.37	-9.8	-14.5	-9.09		
見捨てられ不安	70.93	73.21	71.89	72.2	67.58	67.09	5	0.8
	-19.18	-18.61	-21.43	-18	-21.57	-18.4		
自尊感情	26.1	24.82	25.4	24.76	24.8	26.89	5	0.6
	-9.69	-6.47	-7.7	-8.15	-9.03	-8.32		

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

その結果、親の養育態度と「親密性の回避」の間に有意な差が見られ($F(5, 260) = 3.98, p < .01$)、「叱り」>「見守り」>「褒め」の方が「見守り」>「褒め」>「叱り」と比べて親密性の回避得点が高かった。なお、「見捨てられ不安」の得点($F(5, 260) = .80, p = .54$)と「自尊感情」の得点($F(5, 260) = .60, p = .70$)には有意な差は見られなかった。

2. 研究2：親の養育態度が内的作業モデル及び自尊感情に与える影響

「親密性の回避」および「見捨てられ不安」が親の養育態度と自尊感情との関係を

媒介するか否かを検討するために、共分散構造分析を実施した。なお、親の養育態度において学年別の有意差が認められたため、予めパスを引きその影響を統制した。その結果、「親密性の回避」を媒介変数に仮定したモデルでは各々の適合度指標は概ね許容できる値を示した($GFI = .997$; $AGFI = .983$; $RMSEA = .000$; $AIC = 17.777$)。親の養育態度から愛着スタイルにおける「親密性の回避」へのパスは有意傾向($p = .058 \dagger$)であり、「親密性の回避」から「自尊感情」へのパスは有意($p < .001$)であった。このことから、「親密性の回避」における媒介効果が認められた(図3)。

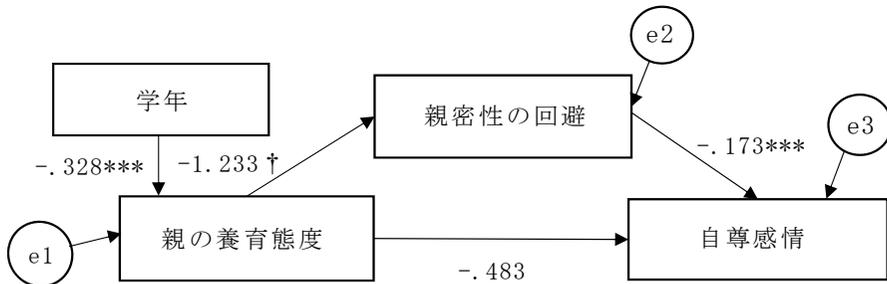


図3 親密性の回避を媒介変数とした媒介分析

なお、「見捨てられ不安」を媒介変数に仮定したモデルでは同様に各適合度指標は良好な値を示したものの (GFI=.997 ; AGFI = .983 ; RMSEA = .000 ; AIC =

17.797), 親の養育態度から「見捨てられ不安」への有意なパスが認められなかった。このことから、本モデルではその媒介効果を認めることはできなかった (図4)

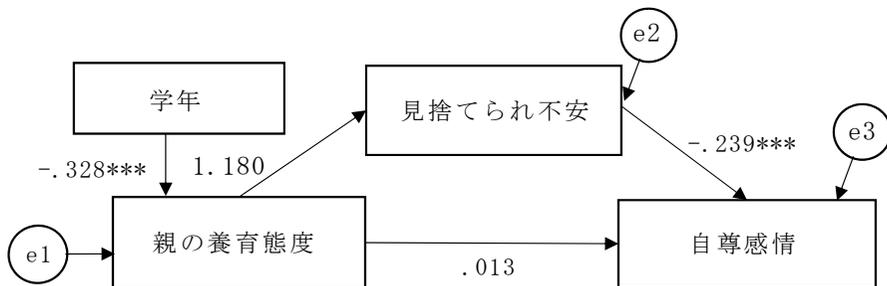


図4 見捨てられ不安を媒介変数とした媒介分析

IV 考察

1. 研究1：「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランス

研究1の目的は、子どもの発達に良い影響を与えるであろう「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて検討することであった。

研究1では、6パターンの親の養育態度間に愛着スタイルにおける「親密性の回避」および「見捨てられ不安」の平均値、「自尊感情」の平均値に差が見られるかを調べるため、一元配置分散分析を行った。その結果、「親密性の回避」のみ有意差が見られ、「叱り」>「見守り」>「褒め」の方が「見守り」>「褒め」>「叱り」と

比べて「親密性の回避」得点が高かった。なお、愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」と「自尊感情」との関連は見られなかった。

このような結果をもとに、親の養育態度である「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて考察する。本研究において、「自尊感情」得点の平均値が高かったパターンの親の養育態度を最も子どもの発達に良い影響を与える養育態度であると捉えることとする。

(1) 自尊感情得点が高かった親の養育態度

6つの親の養育態度それぞれの自尊感情得点の平均値を順にみると、自尊感情得点

が最も高かった親の養育態度は、「見守り」>「褒め」>「叱り」(26.89)であった。これは、「褒め」や「叱り」よりも「見守り」を多く経験しており、「叱り」よりも「褒め」を多く経験している親の養育態度のパターンである。叱ることや褒めることは、養育者自身が好ましいと感じている価値観を子どもに伝える行為であると言える。そして、見守ることは、子どもが自ら考え行動し、成功体験を積むことができるような環境を整えることで、自主性や自律性を促進させる働きかけであると言える。そのため、「褒め」や「叱り」よりも「見守り」を多く経験している子どもは、自分自身の判断や行動に対して自信を持つことができ、自尊感情が向上するのではないかと考えられる。先行研究においても、過保護や過干渉的な関わりや、放任や冷淡な関わりではなく、愛情をもって適度な距離感を保ちながら子どもの自律を促すような関わりが、子どもの自尊感情の向上につながることを示されており(山下ら, 2010)、本研究の結果からも同様な結果が得られている。そして、「褒め」は、養育者から子どもの言動に対して肯定するような働きかけであり、「叱り」は、「褒め」とは反対に、子どもの言動に対して否定するような働きかけである。肯定的な働きかけが自尊感情の向上につながり、否定的な働きかけが自尊感情の低下につながる(佐藤ら, 2013; 野村ら, 2008)という先行研究からの結果と同様な結果が得られている。

(2) 最も自尊感情が低かった親の養育態度

そして、最も自尊感情得点が低かった親の養育態度が、「叱り」>「褒め」>「見

守り」(24.76)であった。これは、「叱り」を「褒め」や「見守り」よりも多く経験しており、「褒め」を「見守り」よりも多く経験している親の養育態度のパターンである。「自尊感情」得点が最も高かった親の養育態度とは対照的に、「褒め」や「叱り」といった養育者の好ましいと感じている価値観を子どもに伝える行為が多く、子どもが自ら考え行動する自主性や自律性を促すような関わりが少ない。これは、つまるところ、統制的あるいは過保護・過干渉な養育態度であると捉えることが出来ないだろうか。柴山ら(2004)は、大学生を対象に、自尊感情と16歳までの両親の養育態度への認識内容との関連について研究している。その結果、女子は父親と母親どちらにおいても自主・独立を強く促されたと感じている者ほど、自尊感情が高い傾向が見られたと報告している。そして、その結果について、幼いころから心理的独立を促されたり、行動の自由を与えられたりといった、他者から一個人として認められる経験をすることが、自己を価値ある存在として受け入れられる自尊感情の高さに結びついているのではないかと結論付けている。また、小児期に自立的な行動を阻害するような関わりや、過保護に育てることは、その後の子どもの自尊感情の低下につながる可能性があるという指摘もしている。本研究の結果においても、子どもの自主性や自律性を促すような「見守り」という親の養育態度の重要性が示唆された。また、養育者が「褒め」や「叱り」を多く用いるような養育態度のパターンは、統制的または、過干渉と子どもから認知され、子どもの自尊感情の低下につながるという

可能性が考えられる。

2. 研究2：親の養育態度が内的作業モデル及び自尊感情に与える影響

研究2の目的は、個人の内的作業モデルを媒介変数として仮定し、「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することであった。

研究2では、共分散構造分析による内的作業モデルの媒介効果についての検討を行った。その結果、愛着スタイルにおける「親密性の回避」の媒介効果が認められ、親の養育態度得点が低いほど、「親密性の回避」得点が高く、そして、「自尊感情」得点が低くなる傾向が見られた。なお、愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」の媒介効果は認められなかった。本研究においても、親の養育態度を肯定的に認知しているほど、「親密性の回避」の得点が低く、「自尊感情」も高くなる傾向が窺え、一部ではあったが、先行研究と同様の結果が見られた（金政，2007；島，2014）。このような結果をもとに以下に考察をする。

(1) 親の養育態度と内的作業モデル（親密性の回避）

「叱り」>「見守り」>「褒め」の方が、「見守り」>「褒め」>「叱り」と比べて「親密性の回避」得点が高い傾向が見られた。

「叱り」>「見守り」>「褒め」という養育態度は、「叱り」と「見守り」を「褒め」よりも多く経験している親の養育態度パターンである。養育者の「叱り」は、子どもの問題行動の抑制や、子どもの人格形

成や社会化において非常に重要な役割を果たすものであるが、その一方で、子どもの行為を否定するニュアンスを含んでいる。そして、「見守り」は子どもの自主性を促す働きかけである。これらのことから、この養育態度のパターンを経験した者は、重要な他者である養育者に対し依存的になれず、自分のことは自分で選択し行動しなければならないため、「他者」よりも「自己」に向きやすいと考えられる。また、自己を否定される経験を、重要な他者から肯定される経験よりも多くしていることから、他者と親密になることに対する抵抗であり、また、他者への信頼感の欠如である「親密性の回避」が高い傾向がみられたのではないかと考えられる。

そして、「見守り」>「褒め」>「叱り」という養育経験のパターンは、「見守り」と「褒め」を「叱り」よりも多く経験している親の養育態度パターンである。養育者の「見守り」や「褒め」は、子どもの自主性や自律性を尊重する関わりであり、また、子どもの行為を肯定するニュアンスを含んでいる。養育者という重要な他者から一人の人間として認められ、受容される経験が否定される経験よりも多いため、他者と親密になることに対する抵抗であり、また、他者への信頼感の欠如である「親密性の回避」が低くなる傾向がみられたのではないかと考えられる。

(2) 親の養育態度と内的作業モデル（見捨てられ不安）

そして、本研究の結果から、親の養育態度の認知と愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」との間には関連が見られなかった。

山口（2008）は、大学生256名を対象として、回想された両親の養育態度の認知が、一般的な愛着表象と関係特異的な愛着表象に与える影響について検討しており、その結果から、「回想された両親の養育態度認知は、一般的な対人関係にまつわる不安との関連は小さく、関係特異的な他者との間での関係不安とより関連していると言える」と述べている。そして、この結果について、「見捨てられ不安」とは、特定の愛着関係を持った重要な他者との関係によってより喚起されるものであり、一般他者への「見捨てられ不安」との関連が薄かったのではないかと結論付けている。この先行研究同様、本研究においても、親の養育態度の認知は、一般他者への「見捨てられ不安」との間に関係は見られなかったのではないかと考えられる。

（3）内的作業モデル（「親密性の回避」、 「見捨てられ不安」）と自尊感情

次に、内的作業モデルと自尊感情の関連について、愛着スタイルにおける「親密性の回避」および「見捨てられ不安」が高いほど、「自尊感情」が低い傾向が見られた。これは、先行研究と同様の結果が得られている（金政，2007；島，2014）。

①まず、愛着スタイルにおける「親密性の回避」と「自尊感情」の関連について考察する。金政ら（2003）は大学生を対象として、愛着スタイルと社会的適応性の関連についての調査研究を行っている。他者との親密さを回避する傾向が高いほど、「社会的活動障害」や「うつ傾向」といった精神的健康状態が悪くなり、また、関係における自己認知では「社交性」と「魅力性」が低くなり、自己を肯定的に捉えることが

出来なくなる傾向が見られるという。本研究においても、「親密性の回避」が高いほど、自分自身を全体としてありのままに受容し肯定的に評価する「自尊感情」が低い傾向が見られた。その理由としては、先行研究でも述べられているように、他者は自分の求めに応じてくれる存在であるかという他者に対する信念や期待をもつことができないうために、受け入れられない自分自身への価値や評価が低下したものと考えられる。

②次に、愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」と「自尊感情」の関連について考察する。斎藤ら（2012）によると、青年期における見捨てられ不安は、「重要で身近な他者（集団）に承認される自信がなく、自身の価値観をありのままに主張すると、重要で身近な他者（集団）から嫌われるのではないかと不安から自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択する心理傾向」と定義されている。また、金政ら（2003）においても、自己モデル（関係不安）が高いほど精神的健康状態は悪くなり、親密な関係においても関係不安による自己確信のなさが見られると報告されている。つまり、「見捨てられ不安」が高いほど、自分自身が他者から受け入れられ、愛される自信がないために、他者からの評価に依存する傾向が見られるということである。これらのことから、本研究においても、「見捨てられ不安」が高いほど、自分自身を全体としてありのままに受容し肯定的に評価する「自尊感情」が低い傾向が見られたのではないかと考えられる。

3. 本研究の限界と今後の課題

そして最後に、本研究の限界点と今後の課題について述べる。

①まずは、調査協力者の養育者からの被養育経験についての調査方法についてである。本来であれば、順序尺度以上を採択するのが基本であり、この「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスの測定方法については今後も検討していく必要がある。

②そして、今回の分析結果において、6つのパターンの親の養育態度の分類ごとに自尊感情得点にそれほど差が見られなかった。その要因として、同じ養育経験パターンの分類であっても、大きく差が見られた可能性がある。「褒め」、「叱り」、そして「見守り」はそれぞれポジティブな効果とネガティブな効果を合わせ持っているものである。そして、どのような状況で、どのように用いられたのかによっても、受けとり手の感じ方は大きく異なると考えられる。本研究において、「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスに重点を置いたが、今後はどのような状況で、どのように用いるか、についても加味する必要があると考えられる。

③そして、本研究は、大学生を対象として、幼少期の被養育経験を想起して回答してもらったものであり、実際の幼少期の親の養育態度とは異なっている可能性も考えられる。現在の養育経験が想起されている可能性もあり、今後検討していく必要があるだろう。

謝辞

本論文を作成するにあたって、貴重なご指導ご鞭撻を頂きました人文科学研究科臨床心理学専攻の野島一彦先生、前場康介先

生に心より御礼申し上げます。並びに、質問調査にご協力頂いた女子大学生の皆様にも深く感謝いたします。

引用・参考文献

阿部晋吾・太田仁 (2014). 中学生の叱られ経験後の援助要請態度—自己愛傾向による差異—, 教育心理学研究, 62, 294-304.

橋本博文 (2017). 褒められた経験が自尊感情およびやり抜く力に与える影響, 日本教育心理学会発表論文集, 50 (0), 524-524.

井上清子 (2015). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, 37, 97-105.

井上清子 (2018). 両親・教師からの褒められ・叱られ経験と自尊感情の関連についてII 生活科学研究, 40, 95-102.

中坪史典 (2016). 子どもの自律的問題解決を支える保育者の専門性: 「見守る」「待つ」保育の実践的意義と奥深さ, 國學院大學人間開発学研究, 7, 2-11.

泉玲・石田弓 (2012) 特定の他者ごとに特有な内的作業モデルを想定した愛着スタイルと対人不安の関連の検討, 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 11, 55-70.

金政祐司 (2007). 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達-愛着は繰り返されるのか-, 心理学研究, 78(4), 398-406.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓 (2013) 日本の母親のあいまいな養育態度と4

- 歳の子どもの他者理解：日米比較からの検討 発達心理学研究, 24 (2), 126-138.
- 国立青少年教育振興機構 (2017). 子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究 (報告書).
- 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳 (1976) 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動, 岩崎学術出版社.
- 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳 (1977) 母子関係の理論Ⅱ：分離不安, 岩崎学術出版社.
- 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳 (1981) 母子関係の理論Ⅲ：愛着喪失, 岩崎学術出版社.
- 松田君彦・児島晃代 (2002). 親の叱りことばの表現と子どもの需要過程に関する研究 (1), 鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編, 54, 187-203.
- 松島暢志・若狭かおり (2020). 養育・保育におけるほめと叱り, 和顔愛語, 48, 1-7.
- 無藤隆・森敏明・遠藤由美・玉瀬耕治 (2004). 心理学 新版 (New Liberal Arts Selection), 有斐閣.
- 中尾達馬 (2012). 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響, 琉球大学教育学部紀要 (80) 225-234.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み, 心理学研究, 75 (2), 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討, 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中島義明ほか編 (1999). 心理学辞典, 有斐閣.
- 中坪史典 (2016). 子どもの自律的問題解決を支える保育者の専門性：「見守る」「待つ」保育の実践的意義と奥深さ, 國學院大學人間開発学研究, 7, 2-11.
- 野村早也佳・福井義一 (2008) 親からの否定的な言葉が自尊感情や愛着型, 社会的スキルに及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集.
- 斉藤富由起・吉森丹衣子・守谷賢二・吉田梨乃・小野淳 (2012). 青年期における見捨てられ不安尺度開発の試み その1：社会構造の変化を重視して—千里金蘭大学紀要, 9, 13-20.
- 坂上裕子 (2005). アタッチメントの発達を支える内的作業モデル 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント—生涯にわたる絆—, ミネルヴァ書房.
- 佐藤純・向居暁・西井宏美・堀下智子 (2013). 中学生は教師からの叱りに対してどう認知し反応するか, 日本教育工学会論文集, 37, 1-12.
- 澤口右京・渋谷昌三 (2014). 「ほめ」に関する心理学的研究の動向, 心理学研究, 10, 93-104.
- 柴山直・新井真由美 (2004). 新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編, 7 (1), 15-27.
- 島義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果, 発達心理学研究, 25, 260-267.

- 竹内史宗・澤田仁・高橋一彦・三宮真智子 (1996). 小学生の“叱りことば”認知—反省感情, さっぱり感に及ばず叱り言葉の有無の影響について—, 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 335.
- 戸ヶ崎泰子 (1999), 小学生の学校不適応感に及ぼす小学生の社会的スキルと養育態度の影響. 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 709.
- 山口正寛 (2008). 回想された両親の養育スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1 (2), 1-9.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山下芙実子・石晓玲・桂田恵美子 (2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討, 臨床教育心理学研究, 36, 21-26.
- 依田あろま・遠藤清香 (2016). 小学校での教師の「叱り」に見られる特徴, 山梨学院短期大学研究紀要, 36, 96-105.